

本を書くという趣味

人にはいろいろな趣味があるが、私は2つの趣味をもっている。1つは教会巡りである。海外、特にヨーロッパの学会に行ったときは、必ずその地域で有名な教会を1つは訪れる。教会に入ってしばらくいるだけで、なんだかとても心が癒される気がする。日々の臨床に追われている臨床医にとっては、教会という空間はリフレッシュできる絶好の場だと思っている。

もう1つの趣味は本を書くことである。ここ数年でも20冊以上は書いている。仕事柄、書く本は医学書ということになるが、難しく堅い内容の本は書かないようにしている。現在、大学病院で医学生、大学院生、ならびに研修医を含めた若い医師の教育を任されている。私の担当は循環器内科全般であるが、専門が心電図および不整脈ということもあって、この分野についての教育を行うことが多い。病棟回診や少人数制のチュートリアルが終わって若い医師に感想を聞くと、「心電図が読めるようになりたい」「不整脈がわかるようになりたい」「循環器薬の使い方を知りたい」「カテーテル・デバイス治療についてもっと知りたい」というポジティブな返事が返ってくる。「もっと勉強したいのですが、知識がないのでわかりやすい教科書を紹介してください」という研修医もいる。いくつかの専門書籍を紹介したものの、書かれている内容が難しいのか、忙しくて勉強する時間がないのかは定かではないが、途中で挫折してしまう研修医が多い。以前から、わかりやすく短時間で理解できる書籍が少ないと感じていた。簡便な書籍で、まず基本的なことをある程度理解してから、詳しい専門書で勉強すると効率がいいような気がする。そのため、私は本を書くときは、初心者を目線に立って平易でわかりやすい言葉を用いて書くようにしている。

書籍の企画あるいは編集を任された場合も同じスタンスで臨んでいる。どの書籍も門外漢の医師でも十分に理解できる内容としており、循環器診療が好きになっていただけのものだと信じている。心電図に関する書籍では、タイトルを「絶対読める心電図」「今さら聞けない心電図」のよう

に、好奇心を持って読んでいただけるように工夫している。理解が難しいとされる不整脈の書籍においては、シェーマを多用することに加えてイラストを入れ、ときにはマンガで書き、現代の若い医師に受け入れてもらえるように努めている。マンガで書くなんて…と言われる大先輩もおられるが、まずはマンガで簡単に全体像を理解し、そのうえで詳しく書かれた専門書を読むと知識も深まると思っている。循環器薬の書籍については、単に薬物の解説をするのではなく、実際に遭遇することの多い症例を提示し、臨場感あふれる内容で記載し、第一選択薬のみならず、その薬が使用できない場合にも対応できるように、第二、第三の選択薬も挙げている。また、近年危惧されるようになった副作用に対する予防と対応についても、一歩踏み込んで書いている。

最近、書籍という範疇から外れると思われるが、手技に特化したビジュアル本も出している。手技は文章のみの記載では理解し難いことが多く、ビジュアルな画像を用いて解説すると理解がより深まり、裏技的なノウハウを含めたスキルアップにもつながる。企画したのは不整脈の治療法であるカテーテルアブレーションとペースメーカーや植込み型除細動器などを用いたデバイス治療に関するものが多い。これまで技術的な面で悪戦苦闘していた若い医師においては絶好の企画であったと自負している。

私を書いた書籍のなかには、10000部以上も売れ、医学書のベストセラーとなったものもいくつかある。読者のなかには、「さぞかし印税をたっぷり貰っているのでは」と、想像する方がいられると思うが、周知のように医学書は印税が低く抑えられており、生計を賄うまでには至らない。本業でしっかり稼いだほうがよいに決まっている。したがって、本を書くということは、あくまでも趣味の一環であると思っている。これからも、若い医師に受け入れられる書籍を数多く手がけていくつもりである。

(内科学講座循環器内科学分野 (大森) 教授：池田隆徳)